

2023

令和5年11月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻363号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあきおう



あき・ふれあい



公益財団法人
さわやか福祉財団



いきがい・助け合い

いきがい・助け合い オンラインフェスタ

2023

すべての人が幸せに暮らせる社会へ

10月2日から16日まで、「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」を開催し、アーカイブ配信は22日まで実施いたしました。助け合いの推進、地域共生社会の実現に向けて、オープニングフォーラム、応援メッセージ、学ぼう編、語ろう編、クロージングフォーラムで学び合いました。

※ 4～11 ページの報告記事もご覧ください。

クロージングフォーラム：子どもの育ちを地域で応援するために



生活支援コーディネーターの 任務と役割



どうする！協議体

地域で望む生活を実現するために、積極的に助け合い活動をケアプランに取り入れよう



地域は孤立しがちな人とどうつながっていくか



認知症の人の社会参加を地域みんなで推進しよう



さあ、言おう

2023年11月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

身近な防犯から考える地域づくり

清水 肇子

4 速報 いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023 すべての人が幸せに暮らせる社会へ

12 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

生活支援と移動支援で 今と5年後の困りごとを解決しよう

多久市暮らしサポートセンター（佐賀県多久市）

18 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

子どもと大人が一緒につくって みんなで食べる子ども食堂

つくって食べよう土曜昼！（福岡市早良区）

24 「地域助け合い基金」 助成先のご紹介／状況のご報告

28 連載 34 老いの暮らしを創る

1時間の出来事

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

30 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から 15

詐欺にご用心

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

新しいふれあい社会づくりに向けて

34 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

35 活動日記（抄）

⑫さわやか書棚

⑮みんなの広場 / 投稿募集

⑯さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう / 新・ひとりごと・吉田田 タカシ

身近な防犯から考える地域づくり

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

「いやあ、田舎のおやじがオレオレ（振り込め）詐欺に引っかかって、危ないところだったんですよ。まさか、うちのおやじが」。数年前のこと、ある企業の集まりで講演した際、その後の懇親会でこう話しかけてくれた男性は、しみじみと言った。「まだまだしっかりしているはずなのに、本当に他人事ではないんですね」

本誌連載のエッセイで、今月号は偶然にも2本とも詐欺がテーマとなっており、この男性のことを思い出した。彼の父親は、地域の金融機関でお金を下ろそうとして窓口の人がおかしいことに気づき、幸いにも被害はなかった。ただあとから聞けば、相当なやりとりがあり、なかなか自分が騙されていることを納得してもらえなかったという。その後父親はしばらくの間かなり落ち込んでいたというのも、心情を考えれば十分理解できる。似たような話を読者の皆さんも見聞きしていないだろうか。

地域社会におけるセーフティネットとは、生活上想定される様々な困難に対してのいわゆる「安全網」。万が一の時には安心して暮らせるための施策であり仕組みだが、こうした詐欺被害の問題でもその重要性はますます増している。

この場合、強いていえば、福祉救済的な、いわゆる何か起きたときの「安全弁」とは別に、防犯をキーワードに、より良い地域づくりとつなげた視点が大きなポイントとなる。多様な連携によるセーフティネットを広げていく、その過程や取り組み自体が地域の安全・安心につながるように。住民皆がそこに参加することで、ひいては本人の生活環境も守られることになる。

今、企業や団体、事業所などは、社会貢献として防犯を意識した地域のセーフティネットづくりに積極的なところが増えていく。地域づくり関係者の皆さんから企業などにどう支え合いを働きかければいいのかわからないと質問を受けることがあるが、防犯まちづくりのうち特に詐欺被害防止と地域のつながりづくりを糸口としてアプローチするのも有効だろう。

東京のある都心の生活支援コーディネーターが、「所得が高い層の地域が多く、そこは地域課題も特段ないので、つながりづくりが難しい」とグループワークで話してくれたことがあった。ますます巧妙化する悪質詐欺は情報が少なくなりがちな高齢者の資産家層が多い地域こそ深刻という一面もある。情報を共有し対策を考え合う勉強会をきっかけにしてはどうかという意見が出ていた。自分だけは大丈夫と思いたいのも人の心。ただ、万一そうした状況に遭遇しても、一言相談できる第三者のつながりがあればそれが大きなセーフティネットとなる。

冒頭の男性の父親を印象深く記憶していたのは、その後心配してくれた知り合いが引っ張って出してくれ、地域で防犯活動をやりながらいきいきと暮らしていますと、うれしい後日談を併せて聞いていたからだ。生活の困り事がないという人たちも一緒に考えられる、実は身近なつながりや助け合いのきっかけにもなる課題なのだと、改めて思い至った。これは認知症の方を見守るネットワークにももちろん通じる。皆さんも自分事として地域で考えてみませんか？

速報

いきがい・助け合い オンラインフェスタ2023 すべての人が幸せに暮らせる社会へ

10月2日（月）～16日（月）の約2週間にわたり、当財団主催「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」を開催いたしました。22日まではアーカイブでも視聴可能、また、参加費と同額を当財団の「地域助け合い基金」に拠出する仕組みとし、皆で学び合ったオンラインフェスタ。今月号では、初日のオープニングフォーラムの内容を中心にご報告します。（文責・編集部）

2日の開会にあたり、冒頭、当財団の清水肇子理事長からごあいさつを申し上げました。

昨年までの3回にわたった「いきがい・助け合いサミット」とこのたびのオンラインフェスタの目的や参加対象は変わっていないこと、サミットの成果を受けて今後、参加者の皆様がどのように地域に働きかけていくのかを中心に学び合う趣旨であることなどをご説明しました。また、オンラインフェスタの内容（「オープニングフォ

ーラム」「応援メッセージ」「学ぼう編」「語ろう編」「クロージングフォーラム」等）についてご案内しました。

応援メッセージ

オンラインフェスタでは開催中毎日、冒頭に多彩な方々からの応援メッセージを配信した。2日には、田中滋氏より「地域包括ケアシステムの可能性」というテーマ

で応援メッセージが寄せられた。

最初に、「2040年まで 変えられぬ未来」として、「1 人口の年齢階層別趨勢↓（現行の仕組みでは）労働力不足」「2 超高齢者増↓ニーズ変容」「3 地域ごとに異なる将来↓ニーズの違い拡大」について説明。その上で、DXやICT、地域包括ケアシステム、社会的包摂（いきがい・助け合い）、社会保障制度等によって未来は変わっていく、とした。特に地域包括ケアシステムの「広がり」や「深化」の部分には当財団が推進してきた助け合いが大変役立つ、と説明した。

また、「自分の力（自助）、自然な助け合い（互助）、制度として連帯の仕組みをつくり（共助）、それと及ばない部分は税金によって政府の力で（公助）」の「4つのヘルプ」が互いに助け合ってはじめて社会が成り立ち、さまざまな理由による社会の分断を起こしてはいけないと強調した。

最後に、「自助は、自分で何でもしなければならぬのではなく、もっと緩いもので、自助と互助の範囲も曖昧であり、互助を使う力、共助・公助をうまく使う力も含まれる。『広がり』『分断を防ぐ社会的包摂』におい

△応援メッセージを寄せてくださった方々▽

秋山 正子氏 暮らしの保健室室長

認定NPO法人マギーズ東京センター長

奥田 知志氏 認定NPO法人抱樸理事長

近藤 克則氏 千葉大学予防医学センター社会予防医学研究部門教授、国立長寿医療研究センター研究所老年学・

社会科学研究センター 老年学評価研究部長（併任）、一般社団法人日本老年学的評価研究機構代表理事（併任）

袖井 孝子氏 一般社団法人シニア社会学会会長

お茶の水女子大学名誉教授

田中 滋氏 埼玉県立大学理事長、慶應義塾大学名誉教授

辻 哲夫氏 東京大学高齢社会総合研究機構・

未来ビジョン研究センター客員研究員

永野 毅氏 東京海上ホールディングス株式会社取締役会長

服部 真治氏 一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会医療経済研究機構 政策推進部副部長（企画推進担当）・研究部主席研究員

原 勝則氏 公益社団法人国民健康保険中央会理事長

元厚生労働審議官・老健局長

村木 厚子氏 社会福祉法人全国社会福祉協議会会長

津田塾大学総合政策学部客員教授

山村 武彦氏 防災システム研究所所長

て、オンラインフェスタ参加者の皆さんがこれまで力を発揮されてきたし、今後も発揮していけるでしょう。応援しています」と結んだ。

オープニングフォーラム

「出会い・ふれあい・助け合い

地域共生社会をみんなでつくるための提言」

進行役 宮本 太郎氏

登壇者 鈴木 順氏

中央大学法学部教授

Jリーグサステナビリティ部社会連携グループ グループマネージャー

吉藤 オリイ氏

株式会社オリイ研究所所長

國生 美南子氏

認定NPO法人たすけあいの会ふきのとう
創設者・副代表

中野 玲子氏

みんなで多文化交流 in 江東会長、
中央大学兼任講師

冒頭、宮本氏が、地域共生社

会とは「出会い・ふれあい」と

「たすけあい」を育む社会であ

り、ご近所だから地元だから当

たり前なのではなく、出会いを



宮本氏

つくり出し、たすけあうことをみんなが選択するからこそ価値があり、心の豊かさにもつながると説明。一方、地元意識などない、重度の障がいがあり動けない、増加している外国人とは言葉も文化も違う、困りごとだらけでつながりをつくる余裕がない、など地域共生社会は「無理かもしれない」という雰囲気もある地域の現状を分析した。

続いて鈴木氏から、Jリーグ

が推進している「ホームタウン活動」について、高齢者施設や学校の訪問など昨年度は58クラブが2万3500回以上のホーム

タウン活動を行ったことを紹介した。同時に、自分た

ちだけでやれることには限りがあることから、地域の人

たちと手をつないでもっと活動を広げていこうと、20

18年に社会連携活動「シャレン！」を立ち上げた。地

域の課題など共通のテーマを3者以上が協働して解決す

ることを定義とし、互いの強みを生かし、弱みをカバー

し合いながら活動しようとするもので、コロナ禍でうつ



鈴木氏

状態になる母親をJリーグの試合に招待するという大学と協働した企画、感覚過敏など生きづらさを感じている子どもたちに、どうしてもしたら試合観戦を楽しんでもらえるかを企業・行政・クラブが一体となって考え実施した活動等を発表。

「たくさんの方々と一緒に、自分事化して地域課題に取り組むことが大事だと思っている」と語った。

吉藤氏は、自身が所長を務めるオリイ研究所の分身ロボット

「OriHime」と、病気そ

の他さまざまな事情で外出することが難しい人、家や病院から

まったく出られない人がロボットを遠隔操作することで

接客するという「分身ロボットカフェ DAWN ver

・β」の取り組みを紹介。「人手不足といわれるが、働

きたい人はたくさんおり、今の時代に合った働き手がい

ないだけ。さまざまな社会で参加し戦力になる働き方を

つくっていかう」と呼びかけた。



吉藤氏

LS（筋萎縮性側索硬化症）や重度障がいがある人のための新しい車椅子の開発や、OriHimeによってさまざまな体験を重ねた少女が開催したブラネタリウムイベント等についても紹介。「私たちも老後になる前に身体を動かせなくなるかもしれないが、このような方法で社会に参加して、人生を謳歌する未来をつくっていくのではないか」と述べた。

中野氏は、幸せな多文化共生

社会をつくるための取り組みを

紹介。東京都江東区の団地では、

日本人住民の高齢化と外国人住

民の増加により住民同士の交流

が減少している。2021年から実施している活動で

「共に暮らす人々が声を掛け合い、手を取り合い、助け

合い、みんな笑顔で『ありがとう』の社会をつくる」と

いう課題に対し、みんなで話し合うプロセスを経て、み

そ汁を作りながら互いの言語を使う活動や、クリケット

& 少年野球大会を実施したところ、コミュニケーション



中野氏

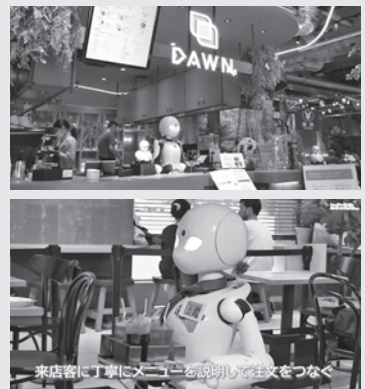
＜特別編＞ 誰にも役割と出番がある社会を

「分身ロボットカフェ DAWN ver. β」を訪ねて

東京・日本橋の「分身ロボットカフェ DAWN ver. β」は、オープニングフォーラムに登壇いただいた吉藤オリィ氏が所長を務める株式会社オリィ研究所が運営しています。外出が難しい人たちが「OriHimeパイロット」として、分身ロボット「OriHime」を遠隔操作しながら接客等を行う同カフェを当財団が訪問し、特別編として配信しました。

岡山県在住のMOONさん（20歳）は、1年8か月ほど前からパイロットとして勤務。MOONさんがこの仕事のために勉強していることや、パイロット同士の交流の中で学び合ったり、日常生活での困りごとを共有して心強く感じていることなどが、OriHimeを介して語られました。「サポートしてもらうだけでなく、誰かの役に立っていることが自分のいきがい」

「カフェで多様な価値観に触れ、自分の世界が広がっており、いつか自分もさまざまな人が働けるお店を開きたい」というMOONさんのお話が印象的でした。



カフェ店内の様子

OriHimeを介して、客とパイロットが会話



があった、と報告。

「一緒にやってみることが大切」「相手の考えをよく聞くことが、感謝につながる」「多様性には寛容に」「自分らしく活動に関わるよう工夫すると、思わぬ広がりが生じる」とまとめ、外国人住民も自分らしく暮らせる・働ける場づくりを、一緒にやってみる。ことが、エンパ

ワメントにつながるとし、一人の中に、助ける自分と助けられる自分がいるという関係性ができると良い、と語った。

國生氏は、「拡げられるか たすけあいによる地域のセイフティネット」と題して、自身の地元・千葉県四街

道市におけるこれまでの取り組みを中心に紹介。昔は家の内外に当たり前にあったたすけあい、人間社会の変化により矮小化されたこと、また、措置の時代にはサポートする人とされる人が対等でないことに違和感を持ち有償ボランティアを始めたが周囲の理解が得られなかったことや、めげずに活動し、小学校の空き教室で始めたコミュニティ喫茶が小さな共生社会となったことなど、地道ながらも先進的な取り組みの数々を振り返った。

さらにその後の介護保険制度や地域包括ケアシステムの効果等にも触れながら、「住民によるエネルギーシユなたすけあいのチームが継続していけるように、行政や社会福祉協議会には、自分たちも一緒にやるよ」という姿勢を見せていただきたい」と強く訴えた。

以上の発表を受け宮本氏は、「皆さん大変ポジティブに、ミッションだけれど楽しんでいらっしやる。プロセスを楽しむことが大事だ」と述べ、愛知県長久手市の吉



國生氏

田一平前市長の「煩わしさを大事にする、遠回りするほど大勢が楽しめて、うまくいかないほど人に役割が生まれる」という言葉を紹介。また、発表の中の「手を抜かない」「(OriHimeは)効率化のツールではない」「できないことが可能性をひらく」など、印象的な部分をいくつか取り上げた。

最後に、「(発表のあった) 4つのストーリーが広がる地域共生社会の展望」を、「つながりを発見して紡ぐ」「出会いのツールをうみだす」「違うからつながる」「困りごとからつながる」とまとめ、「それぞれの地域で参考にして、地域づくりに生かしていただきたい」と結んだ。

学ぼう編

11のテーマを設定し、オンラインフェスタ開催中毎日、テーマごとの基本の情報と各地の事例等を学び合った。

「学ぼう編」のテーマ

◆生活支援コーディネーターの任務と役割

◆ どうする！協議体

◆ 助け合い活動を広めるための都道府県役

◆ 助け合い活動を広めるための評価の考え方とは？

◆ 地域で望む生活を実現するために、積極的に

助け合い活動をケアプランに取り入れよう

◆ 地域は孤立しがちな人とどうつながっていくか

◆ 共生社会づくりの戦略として居場所づくりを

しかけよう！

◆ 生活支援を広めるために「助け合いの理解」を

深めよう！

◆ 移動支援の進め方・広げ方（実践編）

◆ シニアの生活支援活動を含む社会参加の広げ方

◆ 認知症の人の社会参加を地域みんなで推進しよう

これまで助け合いを広めるために財団も推進してきた生活支援体制整備事業に関わる、生活支援コーディネーターや協議体、それをバックアップする都道府県について、全国の好事例を発信した。また、目に見えにくい助け合いの効果の評価方法や、ボランティアによる生活支援活動をもっとケアプランに取り入れるためにはどうす

るかについても事例から学び合った。

さらに、居場所や有償ボランティア、移動支援など助け合い活動のための手法についての事例発表、「孤立」「シニアの社会参加」「認知症の人の社会参加」などの重要テーマについても参加者と学びを深めた。

語ろう編（ライブ）

実践者向けに8つのテーマを設定し、考えた。

「語ろう編」のテーマ

◆ 住民のやらされ感を払拭し、生活支援コーディネーターは地域にどう働きかけるのか

◆ 協議体の可能性を広げよう！

◆ 助け合い活動が広がる支援はどんなもの？

◆ 孤立しがちな人も参加したくなる地域づくり

◆ 居場所はいろいろ 多様な手法を学び合おう！

◆ 助け合いの生活支援をどう広げていけるか

◆ 移動支援の進め方・広げ方（応用編）

◆シニアの生活支援活動を含む社会参加の実践

アンケートやチャット、ワークショップを活用し、事前に申し込まいただいた参加者との双方向で意見を交換。進行役が投げかけた質問に参加者が答えたり、zoomのブレイクアウトルームで参加者にワークショップ形式で語り合ってもらうなど、「学ぼう編」で学び合った内容も踏まえ、各テーマで活発な議論を行った。

クロージングフォーラム

奥山千鶴子氏を進行役に、「子どもの育ちを地域で応援するために」と題して、子ども分野における識者・実践者4名を招き、議論された。

進行役 奥山 千鶴子氏

登壇者 大日向 雅美氏

高橋 由和氏

中山 勇魚氏

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事、認定NPO法人びーのびーの理事長
恵泉女学園大学学長、NPO法人あい・ぽーとステーション代表理事

NPO法人きらりよしじまネットワーク事務局長

NPO法人Chance For All代表理事

山田 幸恵氏

NPO法人ホームスタート・ジャパン理事
・事務局長、ホームスタート・ワールドワイド理事

大日向氏から、あい・ぽーとステーションにおける団体世代シニア「まちプロ」の取り組みの紹介、山田氏からはホームスタート・ジャパンで専門職でなくボランティアの地域住民が子育て家庭を訪問して支援する活動が紹介された。また、高橋氏は少子高齢化が加速する山形県川西町における全世帯加入のNPO法人「きらりよしじまネットワーク」の取り組み、中山氏は生まれ育った家庭や環境で子どものその後の人生が左右されないための取り組みを紹介。

最後に奥山氏が「大人がしっかりとムダやゆとりもあるようなつながりをつくっていきたい」と述べ、これからの子どもたちの育ちを地域で応援するためのメッセージとし、「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」が閉幕した。

引き続き本誌12月号でも「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」についてご報告いたします。また、次号『さあ、やろう』で本フェスタの詳細をご報告いたします。



生活支援と移動支援で 今と5年後の困りごとを解決しよう

多久市暮らしサポートセンター（佐賀県多久市）

佐賀県のほぼ中央に位置し、緑に囲まれた盆地のまち、多久市。かつては炭鉱で栄え、昭和30年代には約4万5000人いた人口も1万8000人を割り込みました。困りごとを抱える高齢者のために、昨年4月、「多久市暮らしサポートセンター」を開設。既存の事業からこぼれ落ちるニーズを細かく拾う取り組みが今、実を結びつつあります。

（取材・文／東田 勉）

アンケートで見えてきた
現在と5年後の困りごと



高齢化率37・8%（今年9月末現在）。

65歳以上6796人のうち、75歳以上が3490人。高齢者に占める後期高

多久市は、人口1万7971人で高

齢者の割合は51・4%に上る。起伏の

多い地形に、かつてのにぎわいを偲ばせる炭鉱長屋が点在し、一人暮らしや高齢者世帯も多い。当然、困りごともし少なくないと予測できる。

同市社会福祉協議会は以前から、赤い羽根共同募金から資金を調達し「わかちあいの和」という有償ボランティア活動を展開してきた。ごみ出し、掃除、買い物、電球交換や布団干しなどの困りごとが、65歳以上であれば30分250円で地域の協力会員に頼める仕組みだ。しかし周知が足りなかったのか、利用者も担い手もなかなか広が

なかったという。

そこで昨年、協議体と市直営の地域包括支援センターが中心となって「日常生活での困りごとアンケート」を実施した。対象は75歳以上で一人暮らしまたは高齢者世帯の1466名。市社協も協力する大がかりな調査となった。各行政区の区長や民生委員の協力を

アンケートでの困りごとランキング

現在困っている

- 1位 庭木の剪定
- 2位 草むしり
- 3位 電球交換
- 4位 買い物
- 5位 布団干し

5年後困りそう

- 1位 買い物
- 2位 通院の送迎・付き添い
- 3位 草むしり
- 4位 庭木の剪定
- 5位 電球交換

得て回収された980名からの回答が「現在困っていること」と「5年後に困りそうなこと」を浮かび上がらせた。現在困っていることは、庭木の剪定、草むしり、電球交換など介護保険でヘルパーができないサービス。5年後の心配ごとには買い物や通院の送迎・付き添いなど移動に関することが上位を占めた。

これらの悩みを住民が主体となって解決していこうと、協議体で何度も話し合いが持たれ、昨年4月1日、「多海市暮らしサポートセンター」の設置による取り組みとなった。

生活支援と移動支援を開始 困っているのは 要支援の人だけじゃない



新たな取り組みは、介護保険の総合事業を活用することにした。生活支援（掃除、買い物、簡単な家事等）は総合事業の訪問型サービスB、おでかけ

サポート（移動支援）は訪問型サービスDに位置付けたのだ。要支援1・2が基本チェックリスト該当者のみという縛りはあるが、市から立ち上げと活動への補助もあり、これで財政基盤が安定した。

「ただし、それ以外の人でも利用できるように、赤い羽根の資金は今でも確保して従来の『わかちあいの和』は残しています。要支援やチェックリストに該当しないからといって、一人暮らし高齢者や高齢者世帯が困っていないわけではありませんから」とサポートセンターのコーディネーター、北島曉さんと安藤邦子さんは口をそろえる。

包括は、周知のための活動案内パンフレットを作成して配布し、生活支援・おでかけサポートの利用会員を募ると同時に、有償ボランティアとなる協力会員集めに尽力した。

その案内パンフレットを見て「利用したい」とサポートセンターへ電話を



暮らしサポートセンターのコーディネーター、
北島さん（左）と安藤さん（右）



田中さん宅で掃除機をかける
協力会員の松丸さん

かけてきたのが、要支援2の認定を受けている田中恭子さん（71歳）だ。昨年9月から週1回、ボランティアが訪問し、1時間でごみ出し、掃除機かけ、風呂場の掃除をしてもらう。

「自分でできないことが多くなって、申し込みました。自宅とごみ集積所の間に坂や側溝があって、ごみを自分で運ぶのが難しくなったし、お掃除も本当に助かります」

使うのは30分250円のチケット2

毎回楽しく活動させていただいてます」と語る。

顔馴染みだから安心
以心伝心の助け合い

事業が始まった昨年7月から、担当のケアマネジャーに勧められて、通院の移送と生活支援の買い物代行を利用しているのが荒川一代さん（83歳）だ。このサービスを利用するまでは週1回、介護保険のヘルパーに来てもらっていた

枚。田中さん宅には2人のボランティアが隔週で訪問する。その一人、松丸美枝子さん（71歳）は、「利用会員さんのありがたうの言葉が原動力です。

だが、こちらのサービスに切り換えてからは要介護認定の更新もしていないそうだ。

「介護保険のサービスは、いざ使うとなると制約があります。その点、ボランティアさんには柔軟に対応してもらって、助かっています」と、住民同士の助け合いの利点を語る。毎回、顔馴染みの同じボランティアに来てもらえるのも気に入っているという。荒川さん宅を訪問して買い物代行を行うのは協力会員の北村智子さん（69歳）。



利用会員の荒川さん（左）と
協力会員の北村さん（右）

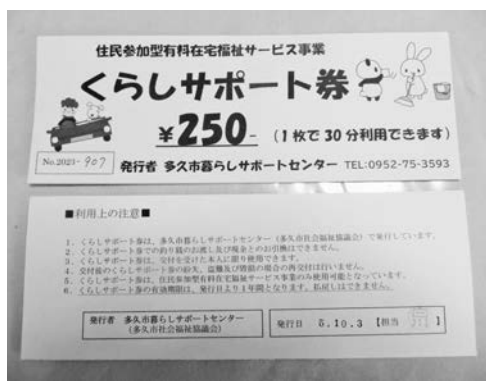
「この年齢でも、誰かのお役に立てることがうれしいです。これから地域の助け合い活動に参加していきます」

北村さんは協議体のメンバーで民生委員。毎週荒川さん宅に通うようになって1年が経つ。お互い猫好きということもあって、話も弾む。一人暮らしの荒川さんにとって、買い物代行を頼み内容を確認し合う北村さんとの会話は貴重な時間だ。

「くらしサポート券」がつなぐ 住民同士のふれあい・助け合い

この日、荒川さんは「くらしサポート券」を10枚購入した。2500円を受け取って領収書を渡した北村さんはこう説明する。

「サポートセンターでは、手作りのチケット（250円券）を用意して、利用会員さんが希望する購入枚数を事前に届けています。1年間有効なので、10枚程度購入なさる方が多いですね。



30分250円で利用できるくらしサポート券。
1年間有効だ

サービスを受けたら、30分なら1枚、60分なら2枚を協力会員さんに渡します。協力会員さんは月末に報告書を出し、謝金を受け取ります。活動費は社協から補助が出るので、30分500円で支払われます」

この仕組みは、利用会員と協力会員が直接金銭のやり取りをしないために設けられた。むろん、何かあったら利用会員や協力会員から随時連絡をもら

う仕組みにしてある。

啓発活動も功を奏して、利用会員は120名、協力会員は45名まで増えた（今年10月3日現在）。利用会員も協力会員も、一度参加するとこの活動の魅力が分かり、双方共に継続性が高いため、今後の伸びもまだまだ期待できそう。

くらしサポート券を通じて、住民同士の助け合いが広がっている。

5年後を見据えて開始 お出かけサポート事業

生活支援は従来からあった「わかちあいの和」をベースにしているが、おでかけサポートは前述のアンケートから生まれた新しい取り組みだ。これには3つのサービスがあり、①外出付き添い送迎サービス（買い物・通院）は昨年7月開始。②通いの場・サロン会場への送迎サービスは、現在1つの行政区で始まっている。③かいもの・は



修了の講習
協力を
取る受ける
転運書員

つらつ教室への付き添い送迎サービスは、モデル事業が行われ、やがて実施される見通しだ。

75歳以上の住民が5年後に困りそうな外出に対する支援が、手厚く準備されつつある安心感は大い。①は協力会員の自家用車を使い、ボランティア

は自家用車にマグネットシートを、腕には腕章をつける。②③は市が準備したミニバンを使うが、①③とも「1日保険」に加入しているのが特徴。このサービスのために保険会社数社と協議を重ね、利



昨年7月、移動支援サービス出発式でのおてかけサポーター（協力会員）の皆さん。前列中央は横尾俊彦市長

用会員と協力会員を守る自動車保険を制度化したという。活動開始前には、運転ボランティアに必要な知識や心構えを身に付ける座学、自動車学校の協力による実習も行った。

通院の送迎が片道だけの利用である点もユニークだ。残りの片道は「JRや

バス、その他の交通手段を利用してもらう。せっかく外出するのだから地域と触れ合ってほしいとの思いがそこにある。一方、買い物は荷物があるので往復の送迎と、カゴ入れや支払い時の手助けを一体的に行っている。

互助を受け継ぎ、発展させ
我がまちの行く手を照らす

サポートセンターが設置されている市社協を訪ねると、市地域包括支援課の課長補佐で保健師の菊池伊津子さん、

SCの北川奈

生子さん、そ

して、住民代

表で生活支援

と移動支援の

活動に参加し

ている佐山光

芳さん（75歳）

に迎えられた。

北川さんは、



市地域包括支援課の菊池さん（左）と、SCの北川さん（右）

「通いの場の啓発や立ち上げのお手伝いが私の仕事。地域で困っている人がいたら、どういうことに困っているのか吸い上げるよう心がけています」と語る。

菊池さんは「地域で移動支援をやるうとすると『すでに家族の移動支援を受けている』という状況もありますし、互助の精神も根づいています。市としてはそういった良さも崩さずに、これ

からの住民主体の活

動を支援していきま

す」と考え方を語る。

そこに縄張り意識はなく、互いに力を合

わせて地域の高齢者

たちの生活を守りた

いという共通の思い

があった。

住民代表として取

材を受けてくれた佐

山さんは、炭鉱で栄



おでかけサポート用マグネットシートを貼った
自家用車の前に立つ佐山さん

え人口が多かった小・中学校時代を懐かしみながら、「おじいちゃん、おばあちゃんに育てられた子どもたちは、今でも横断歩道を渡り終わったら、振り返って停まってくれた車にお辞儀をする。もともと公德心が高い地域なんです。そういうまちですから、住民同士で始めた助け合いをこれからも大事にしていきたい」としみじみ語る。高齢化が進み自助がままなくなつて

も、我がまちは互助がある、という思いはどの関係者にも共通していた。

5年後を見据え、地域の行く手を照らす多久市の新しい事業は、互助を受け継ぐ住民主体の助け合いに支えられていた。

多久市暮らしサポートセンター

2022年4月1日付で多久市社会福祉協議会内に設置された相談窓口。地域住民の日常生活のあらゆる困りごとを解決するために開設された。役割・機能は、①ボランティア活動の活性化につながる広報活動、②ボランティア活動を依頼したい人と活動したい人を結びつける橋渡し活動、③ボランティア養成講座を開設し、ボランティア活動を推進する活動、④住民の生活の困りごと（買い物や外出など）の相談をワンストップで受け止める総合相談窓口活動。

●連絡先／〒846-0002 多久市北多久町大字小侍45-31 多久市社会福祉協議会
電話 (0952) 75-3593 (地域福祉課)

\\いきいき わくわく\\

子どもと一緒に
地域で輝こう



●この子は、朝ご飯を食べたかな？

[illegible]

包丁を握る小さな手が、野菜を手際よく切っていく。

「上手になったね。すごい!」。小学生の手さばきを見ながら大学生が驚きの声を上げる。シニア

子どもと大人が一緒につくって
みんなで食べる子ども食堂

つくって食べよう土曜昼！（福岡市早良区）
さわら

提供された料理を食べるのではなく、子どもと一緒に調理をする子ども食堂があります。さまざまな大人と子どもたちとの共作料理は、地域を元気にする大切な「栄養源」になっています。

(取材・文／境 朗子)

の女性が「慣れた頃に手を切るから、気をつけてね」とやさしく声をかけると、小学生は「ハイッ」と元気に応えた。



大人たちが

ここは福岡市早良区の野芥^{のけ}公民館。毎月第4土曜日に開かれる子ども食堂「つくって食べよう土



大人たちが子どもに包丁の使い方を教える

曜昼！」に、野芥校区の小学生と地域のボランティアが集まって、みんなでぎやかに昼ご飯をつくっている。ボランティアの中心はシニアたち。この日は、子ども約40人、大人約30人の総勢70人ほどが参加していた。

野芥校区はもともと緑豊かな田園地帯だったが、近年、地下鉄や都市高速道路が開通して宅地化が進み、人口が増えた。地域に対する住民の関心は高く、「住んでよかった」と思えるまちづくりを指そうと、自治協議会や小中学校、商工連合などが毎年一堂に会し、「野芥サミット」を開催して情報交換を続けてきた。

野芥校区社会福祉協議会会長の行徳^{ぎょうとくしゅうじ} 收司さん（82歳）は、長年の小学生登校の見守り活動の中で、元気がない子どもの姿をしばしば見かけてきた。

「始業時間ぎりぎりにうつむきながら歩いている。この子たちは朝ご飯を食べているのかな？と心配になりました」と話す。家族のありようは変化している。シングルマザーは孤軍奮闘し、共働き家



野芥校区社協の皆さん。
後列左が副会長の鷹尾さん、右が会長の行徳さん

庭の長時間労働も心配だ。子どもの孤立や孤食は広がっていないか。
「振り返れば校区社協のメンバーは、高齢者福祉への関心は高いが、子どもに対しては不十分

だったと反省しました」

2018年、行徳さんらは市社協と協力して福岡市子ども未来局の担当者を招き、子どもの現状について勉強会を開催。さまざまな地域住民も参加し、食卓を巡る課題を掘り起こした。

● **地域の協力を得て
一緒につくって、みんなで食べよう！**

話し合いから、子どもたちがご飯を食べられて

安心できる場をつくろうと、子ども食堂を開設する企画が進展。子どもが食べるだけでなく、「子どもも大人も一緒につくって、みんなで食べる」という全員参加型に賛同が集まった。

「我々世代の男性は台所に立った経験が少なく、定年退職後に困っています。家庭環境やご近所とのつきあい方も変化しています。男女にかかわらず、子どもの頃から食事づくりを経験することで、生活力やコミュニケーション力も増すのではと考えました」と行徳さん。昔、中学校の夏休みに母親と一緒に食事をつくった日々を日記に綴り、学校に提出したら、国語の教師にとってもほめられた。「食卓」を通して人の暮らしや価値観、社会背景などが見えると言われたそうだ。

「土曜昼！」の開催告知と申込み書が付いたチラシは、野芥小学校を通じて全児童に配布され、申込み窓口は公民館。40人の定員はすぐいっぱいになる。

子ども主体で活気ある子ども食堂を立ち上げるには、地域の協力が必要だ。自治協議会の各団体



開始前、ヘルスマイトとボランティアの皆さんが入念に打ち合わせ

に、子どもを見守りながら一緒につくるボランティアとしての協力呼びかけた。こだわったのは、昔ながらの家庭の味を子どもたちに味わわせること。校

区ヘルスマイト（食生活改善推進員）に相談すると、快諾。メニューの考案とレシピ作成、調理指導まで引き受けてくれた。こうして18年8月、地域の子どもの食堂「つくって食べよう土曜昼！」がスタートした。ヘルスマイト代表の山本啓子さん（73歳）は、「時には『早良かしわ飯』や『博多あちやら漬け』などの伝統食も献立に入れ、だしを取って12人のメンバー全員で事前に試作します。88歳のメンバーは体力面で子ども食堂に足を運ぶのは難しいで

すが、試作はできるので『子ども食堂を応援できるわ』と喜んでいます」と話す。

「子どもたちは、ほめられるとどんどん調理が上達し、自信をつけて目が輝いてきます。外で歩いていると『土曜昼のおばちゃん!』と手を振ってくれる子もいて、うれしいです」と笑顔を見せる。食材は、市社協に相談してつながりができた「グリーンコープ生協ふくおか」が継続的に無償提供してくれるほか、「JA福岡市」の直売所からも一部提供してもらっている。

●保護者、看護師、一人暮らしの人も：

「世代を越えて楽しく話す習慣をつくることは『土曜昼!』の狙いの一つです」と話すのは、野芥校区社協副会長の鷹尾光則さん（70歳）。妻に先立たれ、一人で暮らすようになったシニア男性が、鷹尾さんに「一人でご飯を食べても全然おいしくない」とぼやいた。鷹尾さんは「ぜひ一緒に昼ご飯を食べませんか。そのときに、子ども食堂で使う包丁を研いでくれたら助かりますけど」と

頼んだ。その一言がきっかけで、包丁研ぎの名人は「土曜昼!」で地域デビュー。子どもたちに囲まれてご飯を食べる土曜日を心待ちにするようになったという。

看護師の資格を持つボランティアも参加し、指を切るとか、やけど、熱中症など万一の場合に備えている。病院を定年退職後、民生・児童委員を務めながら初回から参加しているという河村富美子さん（75歳）は、「看護師としてだけでなく、

例えば集中力がなかった子も年月を重ねるごとに落ち着きが 증가しているのを感じます。私たちシニアにとって、子どもに関



いざ、みんなで調理開始!

わり、将来を見守れることは大きな喜び」と語る。保護者でボランティアの水町美津子さん（41歳）は、「我が家も核家族ですが、大勢で食べる楽しさをここで味わっています。子どもは、親よりここで教えてくださることのほうがよく聞きますね（笑）。他のお子さんたちの様子も分かって、地域の子ともみんながかわいく思えてきます」と話す。

地元の団体とつながるだけでなく、いろいろな立場の人たちが参加していることも「土曜昼！」の良さだろう。

●「おいしいご飯、いただきます！」 食後は大学生らと学習会

正午になり、みんなが腕によりをかけてつくった昼ご飯が完成した。本日のメニューは、クリームシチュー、ピーマンのシーチキンとえ、フルーツサラダ、ロールパン。6つのテーブルで「おいしいご飯、いただきます！」のあいさつが響いた。



この日の昼ご飯

小学2年生の女子は、苦手だったピーマンの料理を口にして思わず「おいしい！」と声を上げた。3年生の男子が「うちで卵焼きがつくれるようになります。食堂は、つくっている時間が一番楽しい」と話すと、すかさず隣の4年生男子が「え？ 食べるよりも？」と質問。3年生は「うん！」ときっぱり頷く。6年生女子は「学



みんなで作った昼ご飯、みんなでいただきます！



学習会の様子



参加した大学生の皆さん

校の違うクラスの子とも一緒につくっておしゃべりできるので楽しい」とニコニコ顔だ。

野芥公民館長が誘ったナイジェリアの3年生女子もこの日、初参加。「今日は楽しかった」と笑顔で帰宅した。

「中学生や小学校高学年の子たちが、年下の子の面倒を自然に見てあげているのに感心します」とは、校区の子ども会育成連合会の小井出智恵さん（40歳）。

.....

食事が終わると、ボランティア参加の塾講師1人と大学生4人が、希望する子に宿題を教える時間。この日は、13人の子どもが参加した。大学生の所属はさまざまだが、このつながりは、福岡歯科大学地域連携センターの副センター長、永井淳教授によるものだ。

「今まで子どもたちとふれあうことがなかったけれど、調理と食事で打ち解けた後なので、勉強の話がしやすい。年配の方々がいきいきと活躍されている姿も新鮮です」と砂坂菜吏さん（大学4年生）。

「今後は、障がいのある人、外国の人など、より多様な人たちが集えるようにしていきたい」と行徳さんは話す。

* * *

周囲とのつながりを生かして取り組み、人とはもつとつながり、活動のエネルギーとなる。子どもにも大人にも、「土曜昼！」は成長と気づき、いきがいを得る場所になっていた。全国で広がる子ども食堂への期待は大きい。

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごとと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、協議体での話し合いを経てスタートした団地内のカフェ、全世代の居場所を目指す農園の取り組み、棚田を畑にして収穫物を加工・出荷するまでの活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

京都府宇治市

第2層協議体で地域課題を話し合い

何でも話せるカフェをスタート

きたまきおでん
北槇 ODEN

助成金額 15万円

2021年秋、地域包括支援センター主催の小地域包括ケア会議で、地区担当のSCから、UR都市機構の団地

「グリーンタウン槇島」の地域課題について話し合う場が提案されました。さまざまな年齢層が居住し高齢化率は高くない同団地ですが、自治会がなく、賃貸で住民の出入りも多いことから、1人で散歩している高齢者も見られるなどつながりが薄いと感じられていたそうです。

そこで、地域住民を中心に、SC、包括、UR、介護保険事業所、近隣の大学、行政等と第2層協議体「北槇ODEN」を編成。話し合いを重ねて、「お茶を飲みながら話をして、何気ない話から困りごとや日頃の思いを聞くこと



「グリーンカフェ」の様子

ができた」と、団地の集会所で月1回、誰でも気軽に立ち寄れる「グリーンカフェ」を立ち上げました。本基金の助成金は、カフェ立ち上げのための資金として、衛生用品やコーヒーメーカー、看板、のれん作製材料等の購入、ボランティア保険料等に活用されました。スタッフの名札は「ひきこもりの家族会」の人たちが作製してくれ、介護保険事業所の人たちが季節に合わせた看板を描いてくれているそうです。

昨年12月のプレオープンからカフェは大盛況。折り紙をしながらかしく会話する様子なども

見られたとのこと。今後も開催回数や時間帯を検討するなどして、住民一人ひとりのために活動を継続していきたい、という事です。



みんなで土の入れ替え作業

区役所の出張所跡地を農園とし、住民の新しい憩いの場にしよう、地域担当のSCと検討を重ね、「福祉農園運営委員会」を結成して、地域の役員だけでなく農園に興味のある住民も含めた一体化を目指し活動することになりました。農業体験等を通じて、高齢者が活躍できるいきがいくつと、子育て世代の関わりによる次世代の担い手養成にもつなげることにしました。また、子どもたちが自然の中で安全な農作物を自分で作り、収穫物を食べるという、幼稚園や保育園、小学校の子どもを対象とした体験学習や料理教室も行っていくとい

大阪府大阪市

みんなの畑、みんなの笑顔
農園を作り、全世代が集える居場所に

瓜破地域活動協議会

助成金額 15万円

瓜破地域活動協議会は2013年設立。高齢者食事サービス、ふれあい喫茶、見守り訪問、子育てサロンなどの活動を行ってきました。

区役所の出張所跡地を農園とし、住民の新しい憩いの場

うことです。

対象となる土地の土が農業に向かないことが分かったため、本基金の助成金は畑用の土の購入に充てていただきました。

その後、出来上がった畑の手入れを月2回のペースで行っており、秋にサツマイモを収穫して、12月に地域住民が集まって収穫祭を開催すること。月1回、関係者が集まる会議も実施しているそうです。

スローガンである「みんなで耕し、みんなで育て、みんなで収穫、みんなの笑顔」を大切にし、子どもから高齢者まで集える居場所を目指していく、という報告をいただきました。

福岡県糸島市

棚田を畑にして収穫物を加工・出荷 フードバンク通じて子育て支援団体にも

青空サロン 田縁^{でんえん}デイサービス 大根プロジェクト

助成金額 15万円

青空サロンは昨年度、コロナ禍で屋外の活動ならできるという考えから、遊休地となるはずだった棚田を畑にし、

大根・ジャガイモ・

菜の花の栽培から加工・出荷までの一連の作業を自分たちで行う活動をスタートしました。住み慣れた地域（家）で安心して暮らし続けるための挑戦として、地域で何ができるのか、中山間地域ならではの取り組みであり、高齢者にとっては、長年培ってきた農業の知識・経験・技を生かして役割と出番ができる。特に男性の良い居場所になるであろうという考えです。

また、遊休地とともに増える、イノシシ出没への対策にもなるということです。

本基金の助成金は、種苗や肥料購入、設備改修費用、漬物を作るための漬物桶・重石の購入、食品保険料等に活用されました。

活動のレベルアップ、特に加工品の出荷方法を学びに他市の加工所を視察。そこで現役で働く93歳の女性に出会い、生き方を学ぶ機会にもなったとのこと。また、大根が収穫できた際には、たくあん漬け名人を講師に招き、大変良い



近所の80代女性たちに漬け方を教わり、収穫した大根をたくあんに

「地域助け合い基金」 状況のご報告

たくあんができました。す。
「青空の下で身体を使い汗をかくて、みんなで作業するの
が楽しい」との参加者の声が聞かれるという青空サロン。

直売所に出荷して得られた収入は次年度の活動費に充て、
出荷できない物は、フードバンクを通じて子ども食堂や子
育て支援のNPO法人へ寄付されるということです。

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成し
ている「地域助け合い基金」。

10月15日までの状況をご報告いたします。

(10月15日 当財団ホームページ開示時点)

◎寄付受付額

219件

3190万6836円

このほかに当財団より1億4000万円を供出

◎助成実行額

1022件

1億5954万5034円

地域助け合い基金は、地域共生社会の実現を目指
し、助け合い活動のスタート・継続を支援していま
す。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしく願
い申し上げます。

(事務局長・内田)

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、
助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参
考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、
およびクレジットカード決済は、
QRコードもご利用
ください！

基金に関するご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

老いの暮らしを創る

1時間の出来事

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

「あのー、高額なお振り込みは高齢者の場合警察に連絡することになっているので、しばらくお待ちいただけますか」と、郵便局員が言う。

「ハア、警察？」

「はい、そういうお達しがきているもので申し訳ありません。今、警察に連絡しますのので」
先日、友人に勧められて買うことにした投資信託のお金を郵便局に振込に行った時の出来事です。友人から「私を買った投信、なかなかいいわよ。貴女もどう？」と連絡があり、担当者から細かに説明を受けて私も購入することにしたのです。私たち年金暮らしにとってこれはこれからの資産形成を考えるわけではなく、少しお小遣いが増えれば楽しいわよねえ

と、あれこれと捕らぬ狸話で、大盛り上がりでした。

警察官が2人、やってきました。いきなり警察手帳を見せられて、びっくり。

「お名前は？ お年は？ ご住所は？」

ははーん、詐欺にひっかかるかと疑われているのだな。多くの報道がなされ啓発活動も盛んに行われているにもかかわらず、騙される高齢者は後を絶ちません。警察や金融機関はご苦労なことだなと思いつつも、質問を受けるたびに、やたら腹が立ってきました。

「私、マイナンバーカードを持ってきていますから確認してください」といささか切り口上に。

一応、私の身元確認が終わると、今度は





「振込先と担当者の名前を教えてください」と、先方の確認を始めました。ここで又ムカッ。

後日、その担当者にどんな電話がかかってきたのかを確認すると「村田幸子さんはこちらのお客様ですか。今、郵便局で振込をされるそうだが、間違いないか」と聞いてきたといいます。

しかしその電話が携帯だったので担当者は、「私は貴方が警察の方かどうか知らない。取引があるかないかをお話するわけにはいかない」と答えたそうです。「では直接私の上司と話してください」と電話番号を伝えられ、担当者が確認の電話を入れたことによってやっと、警察官も納得し、私の振込はつつがなく完了しました。

その間、1時間余り。

窓口の向こう側の郵便局員のハラハラしているような視線と、次々と入ってくるお客の

不審そうな目にさらされ続けていました。

特殊詐欺を防止したいという警察側の気持ちはよくわかります。しかもこうして1件1件、草の根的に足で歩いて確認しているのかと、その仕事ぶりを目の当たりにして頭の下がる思いもしました。しかし、しかし、です。頭ではわかっていてもその時の私は、気持ちとは裏腹に、何とまあ、八つ当たり気味だったことか。

自分だけは大丈夫、私は騙されるはずがないと思っている傲慢さ、自信過剰が、警察官に対しての不遜な態度に繋がっていました。

巧妙化する特殊詐欺の悪質な手口。昨年1年間の被害総額は、370億8100万円を超えています。「浜の真砂は尽きるとも、世に盗人の種は尽きまじ」と、石川五右衛門の言う通り、これでもか、これでもかと新手の手口を考え出していきます。騙される可能性は誰にもある。肝に銘じたことでした。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退職後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

人生 100年時代を 生き抜く知恵 15

ジェンダーの
視点から

詐欺にご用心

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子



(そでい たかこ)

お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族 変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路 男の末路』（中央法規出版）、など多数。

私が医療費の還付金詐欺に引っ掛かりかけたのは、7年ほど前のこと。今では、かなり横行している還付金詐欺だが、当時はあまり知られていなかったのも、まったく警戒心を抱けなかった。

ある日、かかってきた固定電話に出ると、区役所の保険課を名乗る男から、「医療費還付金の申請用紙が提出されていない。緑色の封筒を受け取っているはずだ」と告げられた。しかし、まったく覚えがない。締め切りを過ぎているので、特別の手続きをする必要がある。○月○日○時に、区

役所2階の保険課に高橋だか山田だかのありふれた名前の職員を訪ねるようにと言われ、のこのこ出かけてしまった。ちょうど夫が長期入院から自宅に戻って数週間たった頃だったので、そんなこともありかと信じてしまったのである。

約束の時間より大分早かったので、近くにいた職員に尋ねたところ、そんな名前の人はいないし、そもそも保険課という課はないという。考えてみると、医療保険や介護保険を担当する部署はあるが、ただの保険課は存在しない。いろいろ話し合

っているうちに、管理職らしい中年女性がやってきて、それは詐欺だということになった。区役所からの通知はすべて文書なので、直接電話をかけることはないとのこと。

そのまま家に戻ったところ、夕方になって、「なぜ約束通りに来なかったのか」となじるような電話があった。現在は、ＡＴＭに誘導するのが普通だが、当時は、直接会ってというアナログな方法だった。そこで、「あなた詐欺でしょ」と言ったら、とたんに切れてしまった。数か月後には、医療費の還付金が夫の銀行口座に振り込まれた。どうやら手続きはしてあったようだ。

後ほど判明したのだが、詐欺師たちは地域を定めて、電話帳で高齢者らしい名前の人にかたづけから電話をかけている様子。たしかに子とか郎のつく古めかしい名前は、高齢者に決まっている。そもそも今時の若者は固定電話を持っていない。

消費者庁の調べによると、特殊詐欺に騙されるのは、圧倒的にひとり暮らしの後期高齢女性であ

る。近所に住む友人は、夫を亡くして四十九日も終え、ぼんやりしているときにカード詐欺にやられてしまった。カードが不正に使われているからと騙し取られ、気が付いた時には４００万円を下ろされていた。

友人も私も、まさか自分が騙されるとは思ってもみなかったのでショックだった。特殊詐欺に詳しい人によると、自分は大丈夫だと思っている人ほど騙されやすいという。まさにその通りと大いに反省している。

最近では、警察や警視庁を名乗る電話がよくかかってくる。最初は、これも詐欺かと警戒したが、どうやらほんものらしい。必ず女性の声で、「お宅の近所に、今朝から詐欺の電話がかかっているから気をつけるように」とか「最近、詐欺の電話はかかっているか」などと聞いてくる。なぜ警察や警視庁が電話番号を知っているのか気にはなるが、怪しい電話には出ないよう気をつけることにした。



超高齢社会のまちづくり

地域包括ケアと自己実現の居場所づくり

後藤 純

団塊世代の皆が後期高齢者となる2025年が間近となる中、Ⅰ部で超高齢社会と高齢者像を分析、解説している。Ⅱ部では地域包括ケアシステムをまちづくりの視点から捉え、同システムを高齢者の「自己実現を促す仕組み」として紹介。Ⅲ部では「当事者とともに創り出す高齢社会のまちづくりモデル」として、介護保険の総合事業や生活支援体制整備事業等についても触れている。

これから高齢者の居場所や自己実現ができるまちづくりの参考としたい。



後藤純さんは、「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」の「共生社会づくりの戦略として居場所づくりをしかけよう！」（学ぼう編）に登壇していただきました。

後藤 純 著
学芸出版社
本体2,300円＋税

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **さわやか活動日記（抄）**



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2023年9月1日～9月30日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (39件)

(都道府県別50音順)

北海道	埼玉県	高島 一雄
小山 義夫	石川 晶一	藤沼 彰久
岩手県	島村 孝一	柳田 延和
大和田 剛史	高橋 昭夫	吉野 義道
宮城県	千葉県	神奈川県
小野寺 憲一	平 雅久	石毛 陽子
秋田県	田中 光子	鈴木 裕司
伊藤 和喜	茂木 和好	富山県
福島県	匿名希望	岡崎 格
鶴川 洋子	東京都	山梨県
茨城県	栗井 清	清水 喜久夫
関 実枝子	飯久保 寛幸	長野県
群馬県	河内 理美	福沢 千恵子
関山 二朗	小泉 純二	岐阜県

三輪 正善	伊藤 博	福森 宏昌
愛知県	京都府	香川県
清水 サチ子	大江 薫子	行成 輝見
野村 圭一	兵庫県	愛媛県
三重県	高嶋 宏臣	篠川 光加
安田 順子	高橋 伸治	福岡県
滋賀県	山口県	森山 彰

さわやかパートナー法人 (9件)

(50音順)

曙ブレーキ工業労働組合
川崎信用金庫
認定NPO法人
コミュニティ・サポートセンター神戸
NPO法人さわやか学舎
サントリーホールディングス株式会社
住友生命保険相互会社

一般ご寄付 (3件)

(50音順)

一般社団法人全国労働金庫協会
東京海上日動火災保険株式会社
NPO法人
日産労連NPOセンター「ゆうらいふ21」
憩の家 みち (5千円)
井上 卓朗 (4490円)
一般社団法人日本メンズファッション協会
(11万6525円)



さわやか活動日記(抄)

地域支援事業の活動報告は、このページのほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SCⅡ生活支援コーディネーター

各地・各事業の取り組みをご紹介します

助け合いを、広げる。重要性を再確認 第2層協議体向け研修会・情報交換会

■時津町（長崎県）

【9月16日】第2層が4圏

域（小学校区）で立ち上がり、それぞれが動き出している時津町で、長崎県のアドバイザー派遣事業を活用し、協議体メンバーを対象とした情報交換会が開催さ

れた。

フォーラムから住民勉強会を行って主体的な協議体を3年がかりで立ち上げてきた同町。各圏域に温度差があることで、昨年度、すべての協議体が立ち上が

った段階で当財団に相談があり、情報交換会を提案して今年2月に行った。その後も新しいメンバー

が参加していること、コロナの影響等もあり少し停滞している地域も見られること等の課題を感じ、今年度は第1層SCが企画、開催した。財団には「第2層の役割について基本的なことを再度話してほしい」との依頼だったが、「第2層それぞれの取り組みを発表してもらう時間もつくっては」と提案し、プログラムが決まった。

財団の講話では、昨年度（今年2月）の情報交換会で出た意見（特にやつてみたいこと、仕掛け



時津町の第2層情報交換会の様子

たいこと、難しいと感じていること」などをパワーポイントにまとめて共有し、「その後半年経つが、取り組んでみたこと、やってみて気づいたこと、見えてきたさらなる課題等は何ですか」「一人暮らしなども増え、コロナ禍もあり困っている人が増えている中、どう仕掛けをしていきますか」と投げかけ、あらためて協議体の役割を伝え、「助け合いを広げよう」と、

「広げること」を意識してもらった。いくつかの地域では居場所と有償ボランティアを立ち上げて、その運営についての課題など第3層的な活動が中心となっているため、「そこからどう広げていくか」と、助け合

いや居場所の事例、協議体の事例などを挙げて、グループワークで何をしていきたいか話し合ってほしいと伝えた。

続いて、各協議体から熱意が伝わる報告が行われ、他の協議体の取り組みにも聞き入る様子が見られた。質疑応答と総括で、財団から助け合いについて確認する中で、認知症の人と同じ住民として受け入れている助け合いの会や居場所の事例を伝えながら、たとえ認知症になっても地域でのつながりの中で安心して暮らし続けられることの大切さを伝えた。

グループワークは、「①地域に足りない支え合い・助け合いを見つけるには、

どうしたらよいか？」「②地域の他機関・地縁組織とつながるには、どうしたらよいか？」「③地域に協力者を増やすには、どうしたらよいか？」の3つのテーマで、協議体を横断したグループをつくって話し合いを行い、発表してもらった。

活動を広げるため 第2層協議体再編に向けた研修会開催

■寄居町（埼玉県）

〔9月20日〕寄居町で、西部・桜沢・用土地区を対象とした「生活支援体制整備事業・介護予防推進協議会研修会」が開催され、当財団も協力した。この3地区はすでに協議体が設置されているものの、設置から時

間も経過しており、あらためて研修会を行いたいとの声があり、開催されたもの。参加者約25人。3地区を対象としながらも、折原地区からも参加者があった。協議体での学び直しとともに、新たなメンバーも呼び込み

（鶴山 芳子）



寄居町で行われた研修会の様子

協議体を再編したいと、SCが工夫して、地域性を生かした研修会への参加呼びかけも行った。声かけ方法も、回覧による一般住民が中心、介護予防サポーター養成研修修了者が中心、民生委員が中心などで、参加者は地域の特性を反映した人たちとなった。

開会あいさつの後、SCによる本研修会の趣旨説明、第1層・第2層SCの自己紹介が行われた。「地域の皆さんとの関係づくりをしていきたい」と、SCがあるため顔と名前を知ってもらい、地域で取り組みたいことや困っていることなどを気軽に相談してほしい、と呼びかけた。

その後、あらためて生活支援体制整備事業を学んでもらうため、財団より講義。なぜ助け合いが大切なのかを説明し、各地の取り組みについて事例やポイントを紹介した。

続いてのグループワークでは、地域の課題と、その課題を解決するための活動について話し合われた。発表では積極的に手が上がり、「支援するにも、本人のできることは奪わない活動とする」「つながりの場をつくりたい」「子どもが少ないうちからこそ多世代交流の場が必要」「求められるニーズを回覧板で吸い上げた」「あいさつ、訪問などの声かけ」「移動販売」「コロナ禍で止まってしまった

活動を復活させたい」など、これまでそれぞれが感じているだけだった課題を出し合い、それに対してアイデアと知恵を出し合い、話し合うことの効果を体感してもらえたようだ。

第2回の研修会は、熱が覚めないうちに2週間後に行う。その終了後にアンケートを行い、新たに協議体に参加したいという人を募り、協議体の再編を図る。

(岡野 貴代)

町制50周年フォーラム 協議体が助け合い活動への参加を熱く呼びかけ

■ 田上町（新潟県）

〔9月24日〕田上町で新潟県のアドバイザー派遣事業

を活用し、第1層協議体・SC・行政・社会福祉協議



市民フォーラムで登壇した田上町第1層協議体メンバー

会が主催、当財団が共催して初めての市民フォーラムが開催された。町制50周年記念の一環で、「地域支えあいフォーラム・健康づくり講演会」として開催。当初の参加申し込みが少なかったことから第1層協議体も周知に力を入れ、当日は100名ほどの住民が参加。協議体メンバーにも達成感がうかがえた。

フォーラム開会にあたり、佐野恒雄町長が住民に町制50周年の感謝を伝えるとともに「助け合うまちづくりを地域の皆

さんと築いていきたい」とあいさつした。続いて、行政担当の岡部里美氏が生活支援体制整備事業について説明し、町をあげて住民が主体的に助け合う地域を広げていく必要性を伝えた。

基調講演では財団より、「助けてと言えますか？」と呼びかけ、助けてと言いに

にくい地域社会を感じてもらいながら、事業を生かして助け合いを広げている事例や多様な居場所、有償ボランティア、地縁活動など全国の事例を紹介し、「助け合いを広げることで、誰もが好きなことや得意なことを生かして、地域の中で活躍できる社会と一緒にくついでいこう」と呼びかけた。

事例発表では、畑での野菜作りを通じて「誰もが集える居場所づくり」を始めた元教員の取り組みと、近所の一人暮らしの人の相談から「見て選んで買える幸せを」と買い物支援を行っている夫婦の取り組みが紹介された。それぞれ「やってよかったこと」「これからの展望」等を披露してもらい、「田上町でのこのよう

な取り組みはもっとあると思うが、これからSCや行政と共に、さらにたくさん活動を共有する機会をつくり、やってみたい助け合いに取り組んでいこう」と伝えた。また、今回のフォーラム後11月から3回にわたり、助け合い創出を目的とした勉強会を計画して

いる旨、岡部氏から参加者へ説明があった。

その後、全体を通しての質疑応答が行われた。熱心な参加者から質問や意見があり、事例紹介者や財団から回答した。「関心を持って参加したが、講演で『そ

こに暮らす人が動かなければ、住みたい地域はつくれない』という言葉が心に響いた。ぜひ、参加してやっていきたい」という前向き

なコメントもあった。

最後に第1層協議体メンバーが登壇し、たくさんの方の参加があったことへの感謝と、「今後一緒に助け合いを広げていきましょう」と思いがいっぱいの呼びかけが行われた。

アンケートには29名が記名。手応えを感じた協議体メンバーは、さらに住民に呼びかけて勉強会の準備を始める。
(鶴山 芳子)



情報・調査事業

調査政策提言プロジェクト

厚生労働省 地域づくり加速化事業に協力

〔9月14日〕

■川越市（埼玉県）

厚生局主導型の地域づく

り加速化事業として、川越市の第1回支援が行われた。出席者は、関東信越厚生局、

埼玉県、川越市担当課、川

越市関係機関（地域包括支援センター、リハビリテーションケアサポートセンター）、アドバイザー、事務局の日本能率協会総合研究所。アドバイザーは、埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科兼研究開発センター教授・川越雅弘氏と当財団。

同市は、①自立支援型地域ケア会議、②地域ケア個別会議、③担当圏域ケア会議、④地域ケア推進会議の4つの地域ケア会議があるが、各会議の連動が図られていないことから、体系を整理し、図式化したいというニーズがある。8月に自立支援型地域ケア会議の見直しに向けた包括職員およ

び助言者を対象とした研修会を実施しており、この日の支援はそこで出された参加者の意見も参考に進められた。

午前中は、自己紹介、関東信越厚生局による本事業の説明、同市による現状と課題の説明、フリーディスカッションを行った。午後からは、ディスカッションでの意見を踏まえて次回以降の方針を決めた。

ディスカッションでは、積極的な意見交換が行われた。行政側の取り組み意欲が高く、また、リハビリ専門職や包括等からも積極的で前向きな意見が挙がり、行政と関係機関との信頼関係が構築できている様子がうかがえた。

その中で、市全体として課題に真摯に取り組む姿勢があるが、そのことが会議の多さや雰囲気の影響し、立場を越えた意見交換の難しさにつながってしまうといった問題点も洗い出された。また、各地域ケア会議の連動を整理する中で、各

会議で出された課題をどう把握・収集し、課題解決につなげていくのが整理されていないということも分かった。

川越氏による「課題の把握・収集、課題の具体化、解決シナリオの検討・承認、実行、モニタリングという課題解決までの流れに当てはめて全体を捉え直してはどうか」という提案もあり、地域ケア会議の体系図の整

理という狭い視野ではなく、課題の把握から解決までの流れのデザインという、広い視野での整理につなげていくことができた。

また、圏域ごとに状況が異なることも考えられるため、市が圏域ごとに流れを整理し、第2回支援で包括や市社会福祉協議会も含めてブラッシュアップしていくという、次回以降の方向性も決まった。

今後、圏域ごとに課題解決までの流れを整理する中では、課題解決策の検討の場として生活支援体制整備事業を含めた他事業連携も挙げられている。生活支援体制整備事業における協議体は住民主体で地域課題を検討する場であり、その解

決策は住民が選択し、住民ができる範囲で柔軟に実行するものである。地域課題を住民に丸投げして活動を生み出させる場でもなく、事業サービスの代替となるものでもない。財団としては今後、そうした点の意識共有をあらためて図りながら進めていきたい。

(岡野 貴代)

〔9月19日〕

■上勝町（徳島県）

老健局主導型の地域づくり加速化事業として、徳島県上勝町の第1回支援が行われ、厚生労働省、四国厚生支局、徳島県、アドバイザーとして徳島県のさわやかインストラクター酒井やよい氏、東北こども福祉専門学院副学院長の大坂純氏、

当財団が支援チームとして参加。上勝町の担当行政や地域包括支援センター、町社会福祉協議会、一般社団法人、教育委員会など関係者と活発な議論を行った。

上勝町は人口約1400人、高齢化率約52%の中山間地の町。「彩（葉っぱビジネス）」や「ゼロ・ウエスト（ごみ分別）」で知られている。5つの集落があり、山間部のため交通確保が難しく、人的問題やサービス不足を課題としているが、総合事業による効果が見られないことから支援を受けることになった。事前のオンラインでの打ち合わせでは、「サービスに依存しない地域づくりをしたい」との意向もあり、「担当者

のみで抱えることなく、庁内連携や多様な主体の連携も視野に入れ、町全体の状況を捉えてさまざまな助言やヒントを出し合い課題を解決していこう」と話し合ってきた。

当日はまず、立ち上がったばかりの通いの場をはじめ町の様子を見学。目で見ても肌で実感してから役場に帰り、第1回の支援会議が始まった。

厚生労働省から総合事業や加速化事業について説明。担当だけで取り組むのではなく、庁内連携や多様な主体と連携して取り組むことの必要性も伝えられた。続いて、町担当者が町の現状を説明。その後、「上勝町の目指すべき姿」に向けて

支援チームから町の皆さんに質問しながら議論を進めていく中で、課題が浮き彫りになった。例えば「運動できなくなると施設に入る人が多い」「一人暮らしの人たちは、病院を退院すると在宅生活ができず施設に入る」など、家の中の生活支援や近所での居場所等の必要性を感じた。

会議に参加した一般社団法人や町社協からも、住民の意識について聞いた。また、地域には神社を中心とした「名」という昔からの集落のようなつながりが残っている。これまでのつながりを生かした取り組みもできるのではないかと感じた。今回の支援を受けて上勝町が検討を進め、次回11

日本メンズファッション協会様より 今年も「グッドエイジャー賞」チャリティーによるご寄付

9月28日、一般社団法人日本メンズファッション協会様より11万6525円のご寄付をいただきました。2018年から継続して頂戴しているこのご寄付は、同協会が主催する「グッドエイジャー賞発表・授賞式」に出席された方々からのチャリティーによるものです。グッドエイジャー賞の趣旨が、長寿時代を豊かに「いきいきと楽しく、かつこよく、そして魅力ある人生を送られている方を選出し、「グッドエイジャー賞」として顕彰」することから、当財団の理念を理解していただき、授賞式において当財団の活動を紹介しチャリティー寄付を募っていただいています。

寄付先を当財団にいただいた背景には、1997年に堀田力前会長が、同じく同協会が主催する「ベスト・ファーザー賞」を受賞したご縁もあります。「グッドエイジャー賞発表・授賞式」では、出席された方々に対して、現役、退職後を問わず社会参加しようと訴えていただきました。今後もこのような機会を捉えて社会参加について訴えていきたいと考えております。

(内田 信幸)

月の第2回支援に向けた1・5ミーティングで支援チームと話し合う予定。

(鶴山 芳子)

【9月22日】

■壬生町（栃木県）

老健局主導型の地域づくり加速化事業として、壬生町で第1回支援が行われ、厚生労働省、関東信越厚生局、栃木県、石川県立こころの病院認知症疾患医療センター副所長の村井千賀氏と共に当財団もアドバイザーとして参加した。

壬生町は、総合事業費の効果が表れていないとの課題から支援を受けることになった。事前の0・5ミーティングでは、通所型サービスの利用が膨らんできていることや、担当者の異動

による制度の理解不足などの課題を共有した。

当日は担当行政のほか、地域包括支援センターや町社会福祉協議会など関係者も参加しての支援会議となった。厚生労働省の説明に続いて町の現状を共有し、村井氏の進行で「町の総合事業の在りたい姿の整理」をテーマに、2グループに分かれてグループワークを行なった。話し合いを進めていくうちに、アドバイザーや厚生労働省からさまざまな制度の内容や意義等についてコメントがあり、理解を深めていった。また、地域のニーズを共有する中で、それぞれ役割について不足していることや連携の必要性なども浮き彫りになった。二

ーズから地域への働きかけがまだまだである状況も感じた。住民にどう伝えていけばよいのか、そのための体制はどうしていけばよいのか。終了後の振り返りでは、行政の担当課長から「気づきがたくさんあった。

他の市町村の事例など情報を提供していただきたい」との声もあった。

11月13日の第2回支援に向けて、1・5ミーティングで壬生町の考えを共有し、支援内容を皆で組み立てていく予定。(鶴山 芳子)

京都市助成金活用セミナーに協力

【9月2日】京都市市民活動総合センターと京都市福祉ボランティアセンターの

共催で、NPO・市民活動団体に向けた助成金セミナーが開催され、当財団も「地域助け合い基金」の紹介で登壇した。

参加対象者は、助成金活用を考えている人・団体、

活動を始めたばかりの人・団体などで、参加者はオンライン6名を含め30名程度。登壇者は当財団のほかに、阪急阪神ホールディングス株式会社、こくみん共済、公益財団法人明治安田クオリティオブライフ文化財団。助成金を申請するNPO・市民活動団体の多くが、助

成金の活用方法や、申請後の助成団体とのコミュニケーションの取り方について分からないことが多いため、このセミナーが行われた。

当財団からは「地域助け合い基金」について、寄付により成り立っている基金であることや、地域共生社会を推進するため、地域で暮らす人同士の助け合い活動を助成対象としている等の概要説明と併せて、助成先の事例も伝えた。また、本基金の特徴として、申請に際して丁寧な連絡を取れることや、SCとのつながりを重視していること、全国の活動者の参考になるよう、活動内容や本基金助成による活動の報告を当財団ホームページに掲載し、助

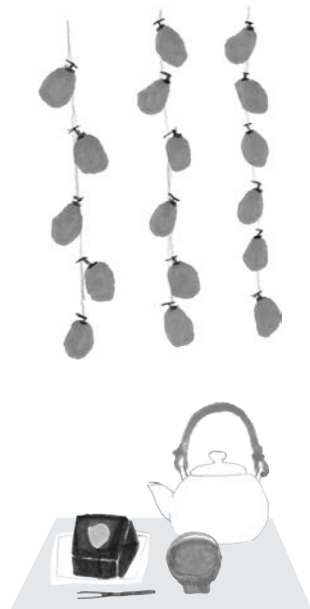
け合い活動を広げていることを伝えた。

セミナーの最後に、各団体がブースに分かれて説明を行った。当財団のブースには、傾聴ボランティアを行っている団体、地域支援を行っている団体、大学教授と協働で地域活動をしている団体など4・5団体（7名）が訪れた。活動を広げたいが資金面で困っている、子どもへの助成は増

えているが高齢者への助成が少ないなど、困りごとや申請について具体的な話をした。当財団の活動と本基

金について伝える良い機会となった。

（目崎 智恵子、三浦 里沙）



事務所 より 事務だ

●何かと話題の対話型A「チャットGPT」。日頃から好奇心あふれる社会参加推進チームのKさんが先日、これに挑戦。「人口減少と少子高齢化が進む地域社会で、助け合いを推進するには」との問いを投げかけたところ、「地域コミュニティの活性化」「ボランティア活動の推進」、そして「これらの活動は地域住民が自発的に参加しやすい形で行われることが重要」など、「なかなか的を射た回答だった」と感心することしきり多くの人の意見から生成される回答らしいから、財団が推進している地域参加もかなり世の中に浸透してきたのかもしれないね！

「連合・愛のカンパ」

団体立ち上げ・新規事業立ち上げのための準備金支援のお知らせ

さわやか福祉財団では、今年度も日本労働組合総連合会（連合）「連合・愛のカンパ」より資金を提供いただき、地域の住民主体による生活支援等の助け合い団体立ち上げや新規事業開始を支援するための助成を行います。

ウィズコロナの環境下、各地で人と人とのつながりや助け合う関係を広げようと、多様な知恵と工夫による取り組みが生まれていることと思います。各市区町村のSCと協議体が支援する助け合い活動（地縁組織やNPO団体、グループ等）の立ち上げ等を支援することにも、ぜひご活用ください。

今回の助成対象は、2022年10月以降に設立された団体、または、既存の団体であっても「新しい事業」を開始した場合となります。1団体につき上限15万円（約16団体）を予定しています。

応募期間 2023年10月10日～2023年11月30日

助成対象 2022年10月～2023年11月末までに立ち上がった、または、開始する予定の新しい活動

詳細や応募方法は、当財団ホームページの「お知らせ」をご参照ください。

【URL】 <https://www.sawayakazaidan.or.jp>

<お問い合わせ> 立ち上げ支援プロジェクト（担当：内田、小林）

電話：(03) 5470-7751 メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

じぶんの町を良くするしくみ。



赤い羽根共同募金は、あなたの町の子どもたち、高齢者、障がい者などを支援するさまざまな福祉活動に役立てられます。

災害時には、「災害ボランティアセンター」の設置や運営など、被災地支援にも役立ちます。

赤い羽根共同募金

www.akaihane.or.jp [赤い羽根](#) [検索](#)

みんなの広場



地域社会とつながり
柱を増やそう

中島 幹夫さん 51歳

愛知県

変化の激しい世の中。企業においても社員のチャレンジが求められます。ただ、仕事一本柱だと、折れる不安から挑戦をためらう場面もあります。

地域社会とつながり、柱を増やす。その精神的安全性が新しい一歩につながる。そういう意味でも、共生社会の推進・企業の積極的な参加は、ますます重要になっていくと感じております。今後ともよろしくお願いいたします。

大変心強いご意見を有難うございます。互助の仕組みを大きな柱に育てて社会の選択肢となるように。それはまさに市場を支える企業や社員の方にとっても大いなる活力になるはずで、そんな共生社会をつくっていききたいですね。

投稿募集

『さあ、言おう』は皆様
の声を社会につなげる問
題提起型情報誌です。
ぜひ皆様の声をお寄せく
ださい。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp



『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます（さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵から はり絵・池田げんえい

「落紅」哲学の道（京都）



編集後記 ●「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」が終了しました。今月号と12月号で報告いたします（表紙裏、裏表紙、P4～）。●「活動の現場から」は佐賀県多久市。現在と5年後の困りごとに対応しようと、生活支援と移動支援を開始しました（P12～）。●「子どもと一緒に地域で輝こう」は、福岡市の食堂。「食べるより調理するほうが楽しい」という子どもの言葉、さまざまな立場の大人たちが楽しんで協力している姿が印象的です（P18～）。●「連合・愛のカンパ」の応募を今月末まで受け付けています（P44）。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

吉田
タカシ

「不登校の問題」といわれるけれど

問題はこどもの不登校ではなくて、

大人の無理解です。

教育を変えるのは

大人一人一人の意識だと思う。

トーキョーコーヒーは登校拒否の言葉遊び。

さあ! たのしい革命を始めよう。



●アトリエ.e.f.t.代表／まほうの다가しやチロル堂代表／DOBERMANボーカル

「トーキョーコーヒー」はアトリエ.e.f.t.が運営するプロジェクト。大人が全力で楽しみながら教育や子育てについて学んだり、こどもが安心できる居場所。開始約1年で全国約300拠点に広がった。

11月号

通巻363号 2023年11月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
取材協力 七七舎
イラスト すずきひさこ
レイアウト 菊池ゆかり
印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

共生社会づくりの戦略として
居場所づくりをしかけよう！



シニアの生活支援活動を含む
社会参加の広げ方



移動支援の進め方・広げ方
(実践編)



みんなで、
地域共生社会を
実現しましょう！



たくさんのご参加、
誠にありがとう
ございました



助け合い活動を広めるための
都道府県の役割



生活支援を広めるために
「助け合いの理解」を深めよう！



助け合い活動を広めるための
評価の考え方とは？